

# Verne y la vida secreta de las mujeres plantas

タイトル ヴェルヌと植物女の秘密の生活

Verne y la vida secreta de las mujeres planta

著者 レディシア・コスタス Leticia Costas

出版社 アナヤ Anaya

出版年 201年

ページ数 224ページ

言語 スペイン語

読者対象 小学校高学年から大人まで

ジャンル 児童書・YA

レポート作成 村岡直子

## 概要

ピオレタの家族には長い間守り抜いてきた秘密がある。ところが、かの有名な作家ジュール・ヴェルヌがピゴの街に現れた日から、それは家族だけの秘密ではなくなった。ヴェルヌは植物女たちの救世主となるのか？ 謎と秘密と家族愛を潜水艦に詰めこんで、海中の森へと向かう冒険の旅が始まった - -。児童文学ジャンルで近年目覚ましい活躍ぶりを見せる著者のラサリーリョ賞受賞作。

## おもな登場人物

ピオレタ：ピゴに住む14歳の少女。本書の主人公。

メリサ：ピオレタの祖母。

フィリポット：ピオレタの祖父。薬局を経営する薬剤師。

アスセナ：ピオレタの母で、フィリポット夫妻の娘。

スマレのネフェアス：ピオレタと運命を共にする花の精。

レモンバームのネフェアス：メリサと運命を共にする花の精。

ジュール・ヴェルヌ：『海底2万マイル』等で知られる著名作家。

ピエール：ヴェルヌが所有する船の見習い水夫。

アントニオ・サンフルホ・バディア：発明家でありピゴの大企業家。実在の人物。

## あらすじ

1～4章

号が、スペイン北部の街ビゴに寄港した。表向きは故障した船を修理するための停泊だが、ヴェルヌには別の思惑がありそうだ。上陸するやいなや、ヴェルヌは見習い水夫のピエールを連れ、とある薬局に向かった。

薬局の店主フィリポットに、ヴェルヌは「植物女のことです」と用件を告げた。フィリポットは意味が分からないふりをしてヴェルヌたちを追い返したが、内心では衝撃を受けていた。植物女とはフィリポットの家族が固く守り通している秘密なのだ。ばれたら薬局をたたんでだれも知る人のいないところへ引っ越さなければならない。ただそれは難しかった。妻のメリサが、身動きの取れない状態にあったからだ。

カ月前から車いすに座り、家族以外のだれにも会わずに引きこもる生活を送っていた。足は根っこに変化しつつあり、頭からは髪代わりに葉っぱが生えてきている。そう、メリサは植物女なのだ。メリサだけではなくその母も、祖母も。そしてずっと前に姿を消したメリサの娘も、今一緒に暮らしている孫娘のピオレタも。彼女たちの家系は、代々植物女が生まれてくるという宿命を背負っていた。

本の木に変身する。と言ってもこれまで住んでいた環境のまま木に変身できるわけではなく、変化を完遂させるには「植物女の森」に行き「魔法の土」に根を張ることが絶対条件だ。変身できなければしおれて枯れてしまう。薬剤師であるフィリポットはプロセスの進行を食い止める薬を調合しようと必死になっているが、メリサにもピオレタにも、それは無駄な努力だとわかっていた。

匹ずつ、小指ほどの大きさの緑色の生きものが住んでいた。この生きものはネフェアスと呼ばれる花の精で、植物女と運命を共にする。メリサの植物化が始まってからというもの、レモンバームのネフェアスはしわだらけになり、生気をなくしていた。

## 5～6章

『万マイル』に敬意を表して「素晴らしいノーチラス号」と名付けていた。家に帰ったピオレタは、フィリポットに潜水艦の話をした。

## 7～15章

種類ある。アスセナのように自分を呼ぶ声に従ってどこかへ行ってしまふ者、そして秘密を抱えたまま生き、やがて植物化のプロセスが始まる者。これまで多くの女たちが、植物女の森にたどり着けずに立ち枯れてしまったという。守り人の家系が代々受け継いできた『植物女の本』によれば、森はビゴの沖合、シエス諸島の地下の洞窟にあった。そこへ行くには海底トンネルを通らなければならない。ピオレタから聞いた潜水艦の話にフィリポットは光明を見だし、これまでかたくなに守りぬいてきた秘密をヴェルヌやサンフルホに打ち明けて相談してみる気になった。

大事な潜水艦を貸してほしいと言われて最初は渋っていたサンフルホとは対照的に、ヴェルヌは非常に協力的で、むしろ率先してメリサの移送計画を立てた。それには理由があった。実は、ヴェルヌ自身が守り人だったのだ。滞在していたカメルーンで偶然植物女の存在を知った彼は、後継者がいなかった同地の守り人に職務を継いでほしいと懇願された。承諾し、フランスに戻って植物女の研究を進めるうちに、ピゴにも植物女の家系とその守り人が存在することに気づいた。そして船の故障をよそおい、ピゴに停泊してフィリポットに会いに来たというわけだ。これまでなすすべもなく枯れていった植物女たちの悲劇を繰り返さないために、ヴェルヌはなんとしてもメリサの移送を成功させたいと考えていた。

## 16～21章

メリサの植物化は最終段階を迎えていた。髪は完全にヤナギの葉となり、肌は樹皮となり、根は成長しすぎて、プランターの土がはじけ飛んだ。メリサのおなかには、木の幹に亀裂が入るように穴が開いた。すると、それまで切り切っていたレモンパームのネフェアスがおなかの穴の中にすっぽりと入り、文字通りメリサと一体化した。そのとき、思いがけないことが起きた。足が完全に根に変化し、自力で動くことなど到底できないと考えられていたメリサが、立ち上がって歩きはじめたのだ。

メリサとピオレタ、フィリポット、ヴェルヌ、サンフルホ、そして水夫のピエールを乗せ、潜水艦は出発した。『植物女の本』の記述に従い海底トンネルの中を進む。トンネルはある地点から垂直になり、やがて潜水艦は海の上に出た。そこはシエス諸島の南島の内部に開いた洞窟。その先に植物女の森があった。植物女の本能に駆られて真っ先に潜水艦から飛び出したピオレタに続き、メリサも自分の脚（木の根）で敏捷に走り出した。そんなふたりのほうへ近づいてくる人影があった。生まれただけのピオレタを父母に預け、呼び声に導かれて姿を消したアスセナだった。

植物女と守り人の子であるアスセナは完全な変身を遂げず、植物女の森の守り人になっていた。この洞窟にたどり着いた女たちを出迎え、人間たちから植物女の世界を守るのが役割だ。人間だったときの心を忘れてしまったように、冷徹に使命を果たしているアスセナは、植物女でも守り人でもないサンフルホとピエールがいるのを見て激怒した。ヴェルヌはふたりを潜水艦に戻らせようとして、彼らがいなければメリサをここにつれてくることはできなかったととりなすが、アスセナは聞く耳を持たない。ネフェアスと合体して植物の全特性を手に入れた植物女は、幹となった体で海に浮かぶことができるのだから、潜水艦など使わなくてもメリサはひとりで来られたはずと言うのだ。『植物女の本』には確かに、島に上陸してから地下の洞窟に入る方法が記されていたが、難解な詩の形で書かれているため、フィリポットたちには読み解けなかった。自分のこれまでの努力と研究はなんだったのかと、フィリポットは打ちひしがれた。

人間に植物女の秘密が漏れたことを許せないアスセナは、サンフルホの潜水艦を壊し、二度と作らないように約束させるとヴェルヌたちに迫った。さもなければ、サンフルホとピエールの命を奪うと息巻く。友人であるサンフルホと部下のピエールを犠牲にするわけにはいかないと悩んだ末、ヴェルヌは潜水艦を沈没させることを決めた。メリサを島に残しての帰り道、海面に浮上してピゴの港に到着する寸前を見はからい、ヴェルヌは機械を故障させた。ピオレタたちはゆっくり感傷にひたる間もないまま、沈みゆく船から逃げ出した。

## エピローグ

フィ  
リポ  
ット  
はメ  
リサ  
を失  
った  
が、  
孫娘  
の世  
話を  
受け  
て幸  
せな  
晩年  
を過  
ごし

た。  
ピオ  
レタ  
は祖  
父の  
跡を  
継い  
で薬  
剤師  
にな  
った  
。見  
習い  
水夫  
だっ  
たピ  
エー  
ルは  
、ヴ  
ェル  
ヌの  
後継  
者と  
して  
植物  
女の  
守り  
人に  
。初  
めて  
出会  
った  
とき  
から  
互い  
に恋  
心を  
抱い  
てい  
たピ  
オレ  
タと  
ピエ  
ール  
は結  
婚し  
て、  
ロサ  
（バ  
ラ）  
が生  
まれ  
た。  
そし

て21世紀の現在、ピオレタの玄孫が14歳になった。名前をリラ（ライラック）といい、やはり植物女である。

#### 所感・評価

フランスからスペインのピゴにやってきた有名作家のジュール・ヴェルヌが、一見なんの変哲もない薬局をわざわざ

ざ訪れ、「植物女」という言葉を口にした。果たして、ヴェルヌの目的とは.....？

ミステリアスに幕を開ける本書は、植物に変身しつつあるメリサの登場で一気に奇想天外なファンタジーの様相を呈し、海洋アドベンチャーを経て思いがけない結末を迎える。様々な要素が組み合わせられた、読み応えのある一冊である。

年にピゴを訪れていること、ピゴの企業家サンフルホが潜水装置を開発していたことなど、実際のできごとがフィクションの中に巧みに織り交ぜられ、物語の展開に重要な役割を果たしている。

奇抜な設定に目を奪われがちだが、単なる空想ファンタジーでは終わらないのも本書の魅力のひとつだといえる。母親代わりに育ててくれたおばあちゃんを安住の地に移してあげたいと願うピオレタの思いやりと、妻を失いたくないというフリボットのひたむきな愛情。その想いに共鳴し、力を貸そうとするヴェルヌやサンフルホたち。普遍的な人間感情がしっかりと描きこまれているため、日本でも多くの読者の共感を得られるのは間違いない。またヤングアダルトに分類される本書だが、大人が読んでも十分に楽しめる。胸をときめかせてヴェルヌの作品を読んだ経験のある人ならなおさらだろう。但し植物女の描写などは迫力満点なだけに、多少グロテスクなので、小さな子どもには向かないかもしれない。

歳以上と書かれている。そのほかにも多少の齟齬が見受けられるので、邦訳出版の際には作者に確認するなどの作業が必要になると思われる。

上記の難点は修正可能なものであり、本書が普遍的価値を持つ作品であるのは確かだ。特に日本人に好まれそうなのが、花の精ネフェアスのかわいらしさ。小指ほどの大きさで、ピオレタの肩にちょこんと乗っかったり、ときにはすねたり怒ったりするネフェアスが実にユーモラスに愛らしく描写されていて、読んでいただけでほほえましい気持ちになる。邦訳出版はもちろん、アニメ映像化も期待したい作品である。

作者について

レディ  
シア・  
コスタ

スは1979年ピゴに生まれ、弱冠20歳で作家デビュー。2010年代に入ってから活躍が目覚ましく、

)で国民児童文学賞を受賞。本書でラサリーリョ賞を受賞し、ミュンヘン国際児童図書館のホワイト・レイブズにも選定されている。本書からもうかがえる通り、生まれ育ったピゴをはじめとするガリシア地方への愛着が強く、まずガリシア語で執筆し、スペイン語版向けの翻訳も本人が行うという制作スタイルをとっている。

試訳（第6章 p.37の11行目からp.39の10行目まで）

「おばあちゃん、ぐあいはどう？」ピオレタがたずねた。

本抜くたびにメリサがひどく痛がるので、そのままにしている。最後には結局、頭が葉っぱで覆われてしまうのだ

---

としたら、それが自然なのだから。

変身のプロセスが始まってからというもの、メリサは来客を断るようにしていた。もう何カ月も、夫と孫娘以外のだれとも会っていない。そうするほかないのだ。だけど近所に住む幼なじみたちはいぶかしく思い、メリサに会おうと週に一度は薬局を訪れてきていた。フィリポットはいつも、すまないねとも言わず、理由の説明もせずにメリサの友だちを追いはらう。そのせいでご近所は、メリサが謎の病気にかかったという噂で持ち切りだ。

「もうまちがないな」フィリポットはメリサの頭に生えた細長くて先のとがった葉っぱをつぶさに見て言った。  
「ヤナギの葉だ」

「ほんのちっちゃな子どものころから、ずっと大好きだった木だわ」メリサが夫を優しく見つめながら言う。「きっとわたし、知らない間に自分で決めていたのね」

「大丈夫だ、治療法の研究を続けているから。こういうのは思いがけないときに方法が見つかるものだよ。必ず食い止めてみせる。失敗はしないよ」

メリサもピオレタもなにも言わない。妻の体を治そうと必死になっているフィリポットを傷つけないのだ。だけど治療法を見つけるという考えそのものが根本的にまちがっていた。だってメリサは、病気ではないのだから。どこか悪いわけではない。メリサはただ、植物女であるというだけ。メリサのお母さんが、おばあさんが、そして一族のすべての女たちがそうだったように。

「おばあちゃん、今日薬局にだれが来たかわかる？」ピオレタがいきなり話題を変えた。このことを言いたくてたまらなかったのだ。

金属製のじょうろに冷たい水を入れて、メリサの脚のまわりの土にかけながら、ピオレタはジュール・ヴェルヌとピエールの奇妙な訪問の話をした。近ごろはこうやって、毎日水やりをしなければならない。そうしなければおばあちゃんがしおれてしまうのだ。肌の下から水分が失われ、しなびていくかのように、メリサの手はしわだらけになっていた。

Source URL: <http://newspanishbooks.jp/read-report-jp/verne-y-la-vida-secreta-de-las-mujeres-plantas>